

私の生きている

この時代を読む

後藤由美子

フィクションをしのぐ現実

現実がフィクションをはるかに超えていることが多い今、ノンフィクションジャンルはおもしろく、興味を引き、今と未来に役立つものがめじろ押しだ。「ありえない」とか「想定外」とか言う前に、どうぞノンフィクションの世界をたんのうし、現実を見据える目を養っていきましょうありませんか？

二〇一一年の現実で何よりも衝撃的だったのは、3・11の大地震・大津波、それに続く原発事故だ。「想定外」という言葉が何度聞かれたことか。しかし『改訂新版 津波物語』（山下文男 童心社）では、すでにこれまで何度もこ

のような大地震・大津波があったことを物語っている。過去に起きた大きな津波を、実話や記録をもとにした物語と科学的な解説を交互に読み進めていけるようにした本だ。その中のひとつの話に戦争末期の東海・東南海地震の話がある。当時は天気予報ですら軍事機密（！）とされ、地震の被害は戦意を萎えさせるとして一切報道されなかった。うわさをしただけでも逮捕されたという。『津波物語』初版は一九九〇だから、もっと広く読まれていれば、と思った。今また改訂され出版されたのは大変意味がある。この中に語られるように、津波の威力はすさまじく、一家から一人でも助かるように「てんでんこ」に逃げろ、という教えは薄情なようだが真実だ。著者自身も体験している。その語り伝えを学んでいた釜石の子どもたちは、放課後であったが皆自らの判断で高台に逃げ全員無事、「釜石の奇跡」といわれている。過去からの物語を読めば、地震国である日本、必然的に津波のくる海沿いに原発を建設することの愚はだれでもわかるというものだ。

言論の自由と知る権利

「天気予報すら軍事機密」というような過去の事実を知らなければ、今憲法にある「知る権利」を大切に思う気持ちもそれほどものにはならないだろう。「えー、天気予報まで!？」ということから発想を広げてほしい。ネット上の